

秋五首

英法一 塩谷安喜

木の葉散るさみちは暗し草かげにちさき蛇出て我に抵抗へり
黒き土踏みつけてゆく畠中の麥の小粒に生はありけり
沈黙の眞畫の光漲れる疊の上に蠅の舞ふ哉
野を行けば大いなる哉鳶の輪のめぐる下には高き木もなし
登る日の影うららかに今日しもぞ民彌仰ぐ日嗣立ちまして

(十一月三日立太子禮奉祝歌)

郷に病みて

一一、丙

春

暁

病床に秋海棠の葉の凋み見つめてあれば涙垂り來も
午さがりふとまごろみゆ覺めぬれば庭の柘榴のボと落つる音
病室の障子開かせしんみりとコスモスの花に見入るわれはも
かそけくも庭の落葉を掃く音の聞ゆるもよし病床にして
友はいまだイツの晝なご習ひ居らむ病む兒は秋の陽を浴びて居り
はりかへし障子明るく秋風の外の面を行くも心地よや朝

いま一たびかのいとけなき群に入り遊戯せまほしなやみもなくに（小學校を通りて）
青黒く淀める沼を樹洩れ日の光りしらうつる淋しさ
つゝましく野菊と並びわが犬は水の面の雲に見入るなりけり
秋の丘草叢行けば入りつ日に蛇の殻の薄光れるも
秋の丘段々烟の芋の葉に夕風そよぎて月出でんとす

海の唄——

習作三篇

二二甲二

原

田

弘

- わたつみはいと静やかに搖めきぬ黃金白銀朝日の昇る。
- 砂白し踏めば、いさごのすくさくとわが足跡の消にもやらずも。
- かにかくに渚歩かむ一日をかくてすぐさば憂ひ消ぬべし。
- 月夜よし舟やるもよし歌ふよし今宵嬉しき波のささやき。
- その夜をば忘れざらめと歌日記筆そめにける寂び心よな。
- 海十浬いざり火遠くつゝきけり嬉し今宵の渚の聲の。
- 悲しみは藻の香する夜にはじまりぬその夜淡月潮鳴の宵。
- 銀の川南に流る戀ふ人を星に詠む夜の今宵の唄は。
- 淋しさは君のことばの少なくて吾が胸あまり暖かき時。